発　行
北海道ポーランド文化協会
〒060-0018
札幌市中央区北 18 条
西 15 丁目 3-19 安藤方
電話・FAX　011-556-8834
ando@high.hokudai.ac.jp
http://hokkaido-poland.com/

POLE

第 86 号　2015. 9. 1
北海道ポーランド文化協会 会誌

北海道ポーランド文化協会
東京事務所
〒107-0052
東京都港区赤坂 9-6-29-309
音響計画株式会社　霜田気付
電話　03-6804-1058
FAX　03-6804-6058

総 会 & 祝賀会に お越しください！

第29回総会・『創立25周年記念誌』出版祝賀会

日時　2015 年 10 月 17 日（土）

総会　16:00～
写真撮影　17:00～
祝賀会　17:15～19:15
祝賀会会費：会員・一般 5,000 円、学生・こども 2,500 円

会場　ホテル札幌ガーデンパレス　４Ｆ　真珠の間（札幌市中央区北1西6）

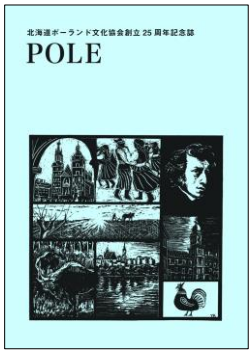
今回は、記念誌の出版を祝って、大勢でにぎやかな会にしたいと思います。ポーランド広報文化センターのブワシチャック所長をお招きしています。札幌在住のポーランドの皆さんも多数ご参加の予定です。

※ お問い合わせは、左上の住所/Tel・Fax/e-mail（安藤）あてにお願いします。
※ 参加申し込みは、同封の返信用ハガキで 10 月5日（月）までにお願いします。
※ 懇親会は、お子様を含めご家族、お友達、会員以外の方もご参加を歓迎します。お誘い合わせでお越しください。
※ 祝賀会のみご参加の方も、写真撮影のため 17 時 10 分前ころまでにお越しください。
※ 遠方からのご参加も歓迎します。ホテルは JAL、ANA、JR などのパックツアーにも対応しています。東京（成田）からは Jetstar、Vanilla Air などの LCC もご利用になれます。ただし、10 月の札幌は観光シーズンにつき、早めにご予約をお勧めします。
※ 会場では、年会費の納入もできます。

『創立25周年記念誌』が完成しました

A4判・110 ページ・2015.8.25 発行。会誌 POLE をもとに 2004～2014 年の本会の活動をまとめました。1.協会の歩み、2.音楽、3.映画、4.交流の歴史から、5.北海道とポーランド、6.さまざまなエッセイの6章から成り、巻末に「会誌 POLE 第 54～83 号目次」と「北海道ポーランド文化協会活動年表 2004～2014 年」を添えました。創立15周年記念誌につづき、協会の歴史と多様なポーランド情報が満載です。

会員には本号とともに1部お届けします。そのほか1部 1,000 円のご寄付でお分けしますので、お知り合いにもご紹介いただければ幸いです。追加分は、総会・祝賀会の返信用ハガキに記入していただくか、左上に記載の Fax/e-mail（安藤）あてにお知らせください。郵送か、総会・祝賀会でお届けします。　（会長　安藤厚）



第 72 回
例会報告

“午後のポエジア” 5を体感して

塚本 智宏

「午後のポエジア」5は 2015 年6月 13 日(土)午後2時から北海道大学クラーク会館3階国際文化交流活動室で開催され、約 50 名が参加しました。今年は北海道新聞の事前取材があり、その記事を見て参加された方もあり、楽しい会となりました。

ポーランド広報文化センターはじめ、たくさんのご支援、ご協力に心から感謝いたします。

ポーランド文化協会の年間行事の一つとして定着した「午後のポエジア」。今年は5回目の開催とのこと。ポーランド語と日本語が交錯しながら、部屋は例によって伝統がある(といえば聞こえはいいが)クラーク会館の古い一室、このときだけ、朗読の声と音楽とが響き合う文化空間となる(格調高い「学芸会」との声もある)。私は協会への参加は新米者で、この土曜の午後のポエジアは今回はじめての体験でした。というよりそれはやはり体感でした。

美しいポーランド語の発音、清新な若者の詩の朗読、成熟した男性たち、思いのこもる迫力ある朗読、心で聴き入る幻想詩や自作詩の数々、子どもの絵本と夢の世界。今回登場した作者・作家は、ヴィスピャンスキ、ミウォシュ、シンボルスカ、バルシュチェフスキ、シュルヴィッツ…ポーランドでは有名な、でも私にとっては覚えたての詩人や作家。これにキーボードによる伴奏と歌、三味線…子ども達の明るく澄みとおった歌声。

そう、やはり協会 HP に書いてあるとおり、「朗読の魅力」をたっぷりと体感し「お洒落な時間」を堪能させてもらいました。「午後のポエジア」は、日本人とポーランド人が家族や友人ぐるみで広く交流する市民に開かれた集いで、今年も最後は懇親の場にポーランドの女性たち手作りのケーキが登場し集いを盛り上げていました(Bardzo smacznego!!)。

来年は私も少しは教養を高めて参加できるでしょうか。コルチャックの文章も詩的といわれます。作品を少し考えてみたいと思います。

参加者の皆様、楽しい時間をありがとうございました！

(つかもと ちひろ)

写真（上から）「午後のポエジア」の書、司会：アレクサンドラ・ヤヴォロヴィッチ=ジムニ&栗原朋友子、出演者挨拶

1．◆ S・ヴィスピャンスキ「わたしの墓前では誰にも泣いてほしくない」エヴァ・コヴァルスカ&新井藤子
2．◆ C・ミウォシュ「別れ」レナタ・シャレック&小林暁子
3．◆ W・シンボルスカ「マリーとピエールの愛」「ピエールの死をこえて」アレクサンドラ・ヤヴォロヴィッチ=ジムニ&大塚広介（以上、写真１段目左から）
4．◆ 宮沢賢治「雨ニモマケズ」マレク・クラフチック＆小笠原正明
5．◆ J・バルシュチェフスキ「白ロシア幻想譚」より 越野剛
6．◆ U・シュルヴィッツ「おとうさんのちず」大久保律子
7．◆ 宮沢賢治「鹿（しし）踊りのはじまり」熊谷敬子（以上、写真２段目左から）
8．♬ M・グレフタ 詞・曲「キミがボクの恋人になったなら」〈歌〉ミハウ・マズル＆〈キーボード〉安藤むつみ
9．♬ 斉藤由貴 詞・崎谷健次郎 曲「月野原（つきのはら）」〈歌＆キーボード〉新井藤子
１０．♬ 三味線演奏〈端唄・三味線〉花季会社中（花季汀蘭＆汀美）（以上、写真３段目左から）
１１．◆ 自作詩「足跡（そくせき）」より 菅原みえ子
１２．◆ 夏目漱石「夢十夜」より 霜田千代麿；懇親会・乾杯発声：小笠原正明（以上、写真４段目左から）
１３．懇親会・ポーランドケーキ；♬「クラクフ人一人」（民謡）＆「ヴィスワ川が流れる」（民謡・E・ヴァシレフスキ 詞）〈歌〉河村明希カリナ・恵李アンナ&リリアナ・コヴァルスカ（写真最下段）

（◆ 朗読 ； ♬ 歌・楽器演奏、敬称略）

スタニスワフ・ヴィスピャンスキの辞世の詩

栗原　成郎

19 世紀末から 20 世紀初頭にかけて「若きポーランド」の芸術運動の美学理念のもとに『婚礼』、『解放』、『アクロポリス』などの一連の象徴劇を創作してポーランド演劇に新時代をもたらした劇作家、ポーランドの美術館を飾る肖像画、風景画の名作を世に残した画家、クラクフの聖マリア教会の内部装飾や聖フランシスコ教会のステンドグラスのデザインなど、広範な美術領域にわたって活躍した多才な芸術家スタニスワフ・ヴィスピャンスキ Stanisław Wyspiański（1869−1907）は、短命で 38 歳で世を去った。彼は、「辞世の句」と言うべき詩を2編残した。その一つは次の詩―

わたしの墓前では誰にも泣いてほしくない
Niech nikt nad grobem mi nie płacze

わたしの墓前では誰にも泣いてほしくない
ただひとりわが妻を除いては
きみたちの犬の空涙も　取り繕った悲嘆も
わたしには何の役にも立たない

わたしの柩の上で弔いの鐘を鳴らすな
慟哭の泣き歌も聞きたくない
わたしの埋葬には雨が泣けばよい
強風が吠えればよい

志のある者は　土の塊を
わたしの息が詰まるまで投げ込むがよい
わたしの土塚の上には太陽が照りつけ
乾いた赤土を焼くがよい

そしてできれば何時か　何時かまた
わたしが寝ていることにうんざりする時、
自分を閉じ込めている仮庵を毀して
太陽に向かって駆け昇るだろう

明確な姿をとどめて飛びゆく
わたしを、きみたちが目にした時は、
私自身の言葉をもって
わたしを呼び戻してくれたまえ

わたしが星となって天界への道を
通りゆく時に　その言葉を聞いたなら
わたしは　わたしを滅ぼそうとした労苦に
いまひとたび　挑むだろう

1903 年7月 22 日　リマヌフにて

もう一つの詩は―

わたしがこの世を捨て去る日が来たとき
Gdy przyjdzie mi ten świat porzucić

わたしがこの世を捨て去る日が来たとき
わたしは、自分のための弔いの歌を
いったいどんなメロディーで自ら口ずさむことになるのか？
なにしろわたしは、とっくの昔にこの世を捨て去ったのだから。

わたしが、もはや縁の切れた懐かしい事どもを
嘆き悲しむのをやめてから　すでに久しい
わたしの悲しみを取り戻し、盗み取られてしまったものを
奪い返すことなど　どうしてできよう。

わたしは、失われた楽園の夢を
とっくの昔に捨てたのだから。
どこかの川のほとりで、どこかの国で…
生きている者として名を呼ばれるために…
わたしは生きているのだから。

どこかの町の、どこかの川のほとりで
わたしは女と結婚の誓いを立てた。
そこで女と自分のために家を建てた、
それを一つの共同の墓地と考えて。

共同の住処であるその墓の上には
風が吹いてきて小枝たちを折るがよい。
秋の雨をともなう嵐の中で
枯れしおれた、もろい小枝たちを。

そうすれば、わたしは墓の中でおのずと聴くだろう
雨が人の世で激しい雨音を立てるのを。
壁の向こう側でその雨音を聞くとき、―
わたしは、再び朝に目覚めることを知る。

朝、太陽がわたしに輝き、
明るく照り輝いて、力強く暖めてくれればよい。

墓にわたしの子どもたちが遊びに来て、そのうち
　の一人の子が
笑い声を立てくれれば、それでよい。

1903 年7月7日　リマヌフにて

これらの詩が書かれたとき、ヴィスピャンスキは悪疾に苦しみながら、ベスキド山脈の山裾の保養地リマヌフに蟄居し、創作にいそしんでいた。ヴィスピャンスキは抒情詩人でもあったが、自作の詩に対しては峻厳な態度で臨み、公表を拒否し、いくつかの詩を焼き捨てるように友人たちに頼み、自らも意に満たぬ作品を焼却したらしい。死を強く意識したこの2編の詩は、親友でクラクフ劇場の舞台俳優のレオン・ステンポフスキ Loen Stępowski（1852–1914）に宛てた私信の中に挿入されたもので、焼失を免れて今日に伝えられた。

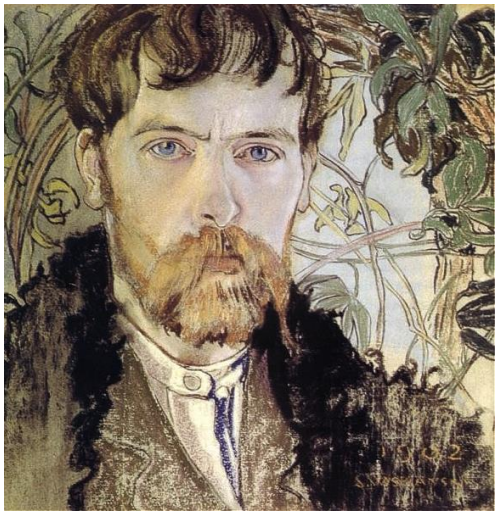
妻子に対する限りなき愛情

これらの詩には、妻子に対する限りなき愛情と不死（復活）の信念と自己の芸術の不滅の精神が強烈に表現されている。ヴィスピャンスキの家族関係は、妻や子どもをモデルにした彼の美しいパステル画から想像できる。「母性 macierzyńwstwo」と題するいくつかの類似の絵画のうち、若い母親が乳飲み子に授乳し、二人の少女が優しくそれを見守っている絵（1905 年作、クラクフ博物館所蔵）は最も有名である。類似の絵の授乳する母親のモデルは、いずれも横顔の美しい若い女性である。私は、ヴィスピヤンスキの夫人も美しい女性であろう、と想像した。ところが、「妻と共なる芸術家の自画像」（1904 作、クラクフ博物館所蔵）を見ると、やつれた姿の画家の隣に描かれている夫人は、どう見ても野暮ったい農婦であり、しかも怒ったような怖い顔をしている。「農民服姿の芸術家の妻」（1902 年作、ワルシャワ博物館所蔵）の女性も厳しい顔つきである。

ヴィスピャンスキ夫人について詳細は知られていない。彼女は名をテオドーラ・テオフィーラ・ピトコ Teodora Teofila Pytko といい、クラクフの西方、ジャブノ近郊の村の出身。芸術家は、彼女をテオーシャ Teosia という愛称で呼んでいたという。テオドーラはクラクフに出て、聖フランシスコ教会の改修工事を手伝っていた。その時、聖堂のステンドグラスの制作に従事していたヴィスピャンスキと知り合い、婚外の子どもを産んだ。クラクフ市当局はそれを把握していなかったため、戸籍等の記録は正確性を欠く。テオドーラは3人の子をもうけた。のちに、芸術家は、妻を籍に入れ、妻子を愛した。彼の描く子どもの絵はいずれも美しい。しかし、当時のポーランドは貴族社会であり、貴族と農民との結婚は、いわゆる“mésalliance”（身分違いの不釣合いの結婚）でスキャンダルの対象だった。それに、芸術家の病気は、当時治療不可能とされた梅毒であった。妻のテオドーラは、当然そのことを承知していた。肖像画に見られる彼女の不機嫌そうな顔は、それを匂わせている。彼は、1890–1895 年のヨーロッパ遊学中にどこかでこの病気に感染したらしい。死が迫ったとき、ヴィスピャンスキは妻と子どもを妻の田舎に返したかフランシスコ会の修道士に養育を託したかしたらしい。

1907 年 11 月 28 日ヴィスピャンスキは世を去った。「わたしの墓前ではだれにも泣いてほしくない。ただひとりわが妻を除いては」という願いとは異なり、彼の葬儀には4万人を超える人が参列して、偉大な芸術家の死を悼んで泣いた。（くりはら しげお）

※ ヴィスピャンスキ「わたしの墓前では誰にも泣いてほしくない」は「午後のポエジア」5(2015.6.13)において、エヴァ・コヴァルスカ Ewa Kowalska さんと新井藤子さんによって朗読されました。



（左）ヴィスピャンスキ自画像（1902）
（右）妻と共なる芸術家の自画像（1904）
Wikipedia ポーランド語版より

バルシュチェフスキ『ベラルーシ幻想譚』より

越野 剛

リトアニア、ベラルーシ、ウクライナはかつてポーランド文化の強い影響下にありました。これらの国々にはポーランド語で書かれた多くの文学作品が残されています。ベラルーシ出身のヤン・バルシュチェフスキ Jan Barszczewski（1790/94–1851）もその一人で、ベラルーシの伝説やフォークロアをもとにした作品をポーランド語で書きました。ポーランド本国では忘れられた作家ですが、ベラルーシでは今日でもよく知られています。代表作の『士族ザヴァルニャ、あるいはベラルーシ幻想譚』（1844–46）は表題に「ベラルーシ」が入った最初の文学作品とも言われます。士族ザヴァルニャの屋敷に泊まる旅人たちが宿賃がわりに語る不思議な物語を集めた、いわばベラルーシ版の「千一夜物語」です。

狼に変身した男マルカの物語

そのうちの一話、狼に変身した男の物語を紹介します。マルカというベラルーシ人の農民はアリョーナという美しい娘に惚れこんでいるが、彼女は領主のお気に入りの男と望まぬ結婚をさせられます。結婚式の祝いの席でマルカは魔法のかかったウォッカを飲まされて、そのせいで狼に変身してしまいました。マルカはその後何年ものあいだ森の中で暮らすことになります。腹いせのため自分に魔法をかけた男の娘をさらうという罪を犯しますが、カトリックのお坊さんの説教を聞いて悔い改め、狼の姿のまま人間のために善い行いをしようと決心します。やがて不思議な夢の中で墓場から自分の死体を掘り起こすように命じられ、目が覚めると人間の姿に戻ることができました。ここでは、動物に変えられた人間を元に戻す力を持つという魔女のアクシーニャの屋敷を、オオカミになったマルカが探す場面を翻訳しました。（こしの・ごう）

《森の中から谷間へと駆け下りてみた。天気のよい静かな朝だ。ふと見ると、手足と首がまっ白な猫が草むらに座っている。背中は白と黒のしまもよう。眼をきょろきょろさせている。ぴょんと跳びはねると花の上の蝶々を捕まえた。猫が楽しそうに跳びはねて遊んでいるのを木陰からずっと見ているうちに、その猫を捕まえたくてたまらなくなり、とびかかった。けれど猫は風のように身軽に草むらから飛び出してしまう。猫が丘をのぼって走れば、私はその後を追いかける。もうすこしで手がとどくというところで、なんと猫はカササギに姿を変えて、空に舞い上がってしまう。その先をなおも追いかけていくと、一軒家がぽつんとあるのを見つけた。カササギは屋根の上にとまると再び猫の姿に変わった。よく見ると、そこいらじゅうにいろんな毛色の猫がいる。屋根の上にも、窓べにも、中庭にも、どこもかしこも猫、猫、猫ばかり。

どうやらここが魔女のアクシーニャの住処だろうと察しがついたので、家に入ったものかどうかとその場で考え込んだ。狼の姿をした私は歓迎されないだろうから、どこかで魔女が散歩しているところに顔を出すのがよいだろう。おとなしく足元にはいつくばって私の身の上をあわれんでもらおう。茂みの中に隠れて、よいきっかけを待つことにした。

太陽が森と山の向うに隠れた。うっそうとした森のきわを夕闇が包みこむ。近くの湖は柳にふちどられた水面をまだ光らせていた。すると、猫という猫が、家の中から、屋根の上から、中庭から群れをなして野原のほうに走り出す。そして何かの葉っぱを食いちぎると、その場で若い娘の姿に変身するではないか。娘たちは茂みの間に散らばって、歌を歌ったり、踊りを踊ったり、花を摘んで花輪を編んだりしている。私もその野原に走った。青い小さな花のある葉っぱを見つけて、ちぎって飲み込んだ。するとまたたく間に私は人間の姿になった。えもいわれぬ喜びにかられて、私は蓮っ葉な妖精ルサルカたちの群れに加わった。一緒になって走り、踊って、楽しんだので、自分のみじめな境遇をすっかり忘れてしまうほどだった。

遊び楽しむうちに夜も更けてきた。森には鳥のさえずりも止み、フクロウの鳴く声だけが聞こえる。一羽のフクロウが飛んできて、魔女の家の屋根にとまり、眼をぎらぎらさせながら、赤ん坊のような声で泣いたり笑ったりした。すると不意に森がざわめき、湖で波が岸辺に打ち寄せた。ルサルカたちは「真夜中だわ、真夜中だわ」と口々に叫んで、いっせいに猫の姿に変わり、アクシーニャの屋敷の中庭に駆け込んだり、屋根の上に這い上がったり、窓から家に身を隠すのもいた。私はふたたび狼の姿にもどって森の中に走り、緑の濃いもみの木の下に横たわって、一夜の出来事に思いをはせた。人間の姿に変わるのが長くは続かなかったのは残念だった。ここに残って、ほんのひとときでも自分の不幸せを忘れたいと心に決めた。》

《第 73 回例会報告》

時計台コンサートを聴いて

高橋健一郎

6月 30 日、小雨の降るあいにくの天気ではあったが、久しぶりの北海道ポーランド文化協会のコンサート「ピアノで奏でるポーランド」(時計台ホール)に出かけた。

ショパンの名曲と並んで、バダジェフスカやモシュコフスキ、パデレフスキといった、ショパンの陰で忘れられがちなポーランドの作曲家たちの作品を散りばめたプログラムは、ほかではなかなか聞くことの出来ない、この協会ならではのものだろう。しかも、単にいろいろな曲が並んでいるだけではない。聴き手がポーランド音楽の様々な側面を十分に堪能できるように配慮されたユニークな構成だった。

コンサートは薄井豊美さんの軽妙で楽しい解説に導かれながら、バダジェフスカの《乙女の祈り》で幕開けした(演奏は安藤むつみ[敬称略、以下同じ])。作曲技法的にはごく単純な曲でありながら、やはり長い歴史の試練を経た人気曲には独特の力がある。聴衆は一気にポーランド音楽の世界に引き込まれていった。

そのあとはパデレフスキの《メヌエット》、ショパンの《ワルツ第7番》とモシュコフスキの《愛のワルツ》(以上、高島真知子)、ショパンの《軍隊ポロネーズ》(安藤)と、舞曲が続けて4曲演奏され、前半最後はこれまた舞曲であるモシュコフスキのピアノ連弾曲《ポーランド舞曲》(マズルカ2曲、ポロネーズ、クラコヴィヤク)で締めくくられた(高島、名取百合子)。舞曲はどの民族の音楽においても、最も基本的なものの一つだけれど、ポーランドはとりわけ舞曲が発達しているのではないだろうか。軽やかなワルツ、勇壮なポロネーズ、繊細に気分がうつろうマズルカ、軽快なクラコヴィヤク……この日奏でられた曲も、眼前にまるで民族衣装を着たポーランド人が踊る情景が浮かんでくるようで、民族の根っこの部分としっかり結びついた音楽であることが分かる。そして、何よりその軽快なリズムに乗って、爽やかで、軽やかで、でも時に哀愁を帯びた歌が流れるところがいかにもポーランドらしい。

こうして、聴き手はポーランドの舞曲を聞きながら、いつしかポーランドの土の香り漂う世界にどっぷりと入り込んでいった。

後半はショパンの作品が並ぶ。ショパンの音楽はやはり格別である。コンサート前半でたっぷりと味わったような土着の踊りの音楽を根に持ちながらも、それを超えた個性を強烈に放つのがショパンである。

うっとりするような歌がひたすら流れる《ノクターン作品9-2》から始まり、歌謡性に幻想性が加わった《幻想即興曲》と続く(名取)。そして歌謡性と幻想性にさらにドラマ性、哲学性、物語性などが組み込まれた壮大で深遠な世界を、高度なピアノ書法で紡ぎだす《バラード第4番》(横路朋子)。ショパンのピアノ曲のもつ様々な魅力が3人の演奏者の熱演によって存分に描き出されていく。

最後は、ショパン《四手のための変奏曲》(名取、横路)。円熟の極みの大傑作《バラード第4番》とは打って変わって、若書きの楽しい変奏曲である。それまでショパンの奥深い精神性に触れながら、神経を研ぎ澄ませて耳を傾けていた聴衆を、最後に軽やかに現実世界に引き戻すかのように、とても楽しげに演奏されて、プログラムが締めくくられた。

こうして1時間半ほどの短い時間の中で、バダジェフスカに始まり、ポーランドの様々な舞曲、そしてショパンの作品を通過しながら、ポーランド音楽の魅力が存分に伝えられた。会場を埋め尽くした人々も(小さい会場ながら、これほど人が入ることは本当に珍しい)[150 人入場]皆その魅力を堪能したに違いない。

素敵な一夜を与えてくださった演奏者の方々、企画し、運営してくださった方々に心より感謝申し上げます。 (たかはし けんいちろう)

写真(左)最後に「森へ行きましょう」を大合唱(左から薄井、高島、横路、名取さん)
(右)札幌在住のポーランドの皆さんと安藤さん

The・対 談

『パプーシャ

― ふたりの監督はパプー

氏間　佐藤さんはこの夏ポーランドに旅行をされ、アウシュビッツにもいってこられたそうですね。映画『パプーシャの黒い瞳』のモデルになったロマ人（ジプシー）は第二次大戦中に少数民族の中で人口比では最も多くの人が虐殺されたそうですね。

佐藤　そうなんです。アウシュビッツの発行している「アウシュビッツ・ビルケナウ/その歴史と今」(2015)という出版物によると、ロマは2万1千人もの人々が殺害されています。これはユダヤ人（100 万人）、ポーランド人（7万～7万5千人）に次いで多数です。戦後 70 年の節目なので行く気になり、合掌してきました。

氏間　アウシュビッツ強制収容所解放 70 年に寄せての渡航ですね。本作『パプーシャの黒い瞳』(2013) が日本で公開され、故クシシュトフ・クラウゼ監督の作品は『借金』(1999)、『ニキフォル　知られざる天才画家の肖像』(2004)、『救世主広場』(2006) に続きこれが4作目ですね。ポ文協主催の映画祭やポーランド広報文化センターのおかげで日本語字幕での鑑賞が実現しました！

モノクローム映像と音楽の魅力

佐藤　ポーランド映画はモノクロームの作品が多いですが、今回もパプーシャの心情に合致したトーンが良く、今年はこの作品まで 87 本を劇場で観ましたが、私の中では今のところ外国映画ベスト3に入っていますよ。

氏間　そうですか。『イーダ』(2013) も昨年観て唸りましたが、本作も同じく記憶に刻まれた感じです。ポーランドならではの引きのショットによる平原の映像美、作曲家パヴルシキェヴィチのハイクォリティな音楽。こだわりのシーンの美しさにはため息です。それらが一層パプーシャの人生（1910 頃～1987）の過酷さをとても際立たせていました。

佐藤　幌馬車の隊列が行く原野の場面は“素晴らしい”の一語に尽きます。音楽はロマ調が目立ちました。ロマ自体も恵まれていませんが、この女性詩人パプーシャの生涯も痛々しいですね。15 歳で無理に結婚させられ、国のロマへの定住政策、最後は詩集の出版による追放など、これでもか、これでもかと過酷な状況でした。

　ところで、『イーダ』を配給したマーメイド・フイルムの「クロード・ランズマン特集」で上映された『SHOAH　ショア』(1985) を初めて観たけど、凄い作品だった。（ドキュメンタリー/9時間 27 分）〈於シアターキノ、7月 25–28 日〉

氏間　ランズマン監督はフランス人で現在 90 歳、第二次大戦のとき高校生でレジスタンスに参加。サルトルやボーヴォワールとの親交もあり、『パプーシャ～』の時期とも重なりますね。多くの映画作品にいえますが、価値観変動の中、絶妙なタイミングというかいくつもの偶然が作中の物語を生んだことがわかります。どの社会にも異なった人たちはいて、それが故に非常に魅力的であると同時に恐れや恐怖の対象になる。そういう異なるものとの出会いがテーマになっていました。

佐藤　私自身、ポーランドのことはあまり解っていないということを今回の旅行で痛感しました。「ジプシー」という蔑称がようやく「ロマ」になったのが最近のことで、アウシュビッツ唯一の日本人ガイド中谷剛さんは「ジプシー」という語はもう使っていないと強調していました。

民族の伝統を後世に伝える

氏間　ロマ人は常に移動していますし、（いわゆる西洋的）教育が必ずしも重要ではなかった。自分たちの記憶の痕跡を残すことができなかったんですね。ヒエラルキーが激しい社会でもあり、誇り、矜持、自負というものがとても強い民族です。そういう中でフィツォフスキがロマ人の証言を集める役割を買ってでて、言葉で表現することをパプーシャに促したわけです。

佐藤　この映画で感じたことは、私は日本におけるアイヌ民族もこれに酷似しているなと思いました。文字を持たない点、狩猟民族、伝統的行事、外貌などが共通点だと思います。パプーシャに当たる

佐藤 晃一 × 氏間 多伊子

の黒い瞳』をみて

シャの物語に命を与えた ―

のが知里幸恵と感じます。しかしアイヌは映画になかなかならないですね。北海道の先住民族をもっと尊重して然るべきだと思います。

氏間 たしかにそうですね。ところで今回配役のロマ人たちはポーランド語も話し演出に関する技術的なことは、普通にわかり合えたそうです。主役の3人はポーランド人なのでロマ語を習い正確に習得し、即興でセリフが言えるくらいにも。問題は、言語ではなく、文化的な問題で、家父長制の社会ですから女性(監督や衣装さん)から指示されるのはどうしても我慢できない(笑)。しかし徐々に、現在は存在しない自分たちの世界を映画の中で再現していく、それが観客の記憶に残るとすれば、正しいものを伝えなければいけないという使命感を持つようになったそうです。セリフにも「読み書きを覚えたことが不幸せの始まり」とか、少女ブロニスワヴァ(愛称パプーシャ)が生まれた時の暗示も印象的でした。ロマ人独特の文化や秘密保持の理由も考えさせられました。

佐藤 単なる哀しみを描いただけでなく、観終わったあと「民族」や「時代」について考えさせられました。意外と重い映画だったと思いますね。

氏間 複雑であり多くのメタファーを含み、ある意味「喪失」についての映画だと私は感じました。ヨアンナ・コス=クラウゼ監督が来日し、インタビューのなかで「パプーシャはロマ人にとって誇りであったのか、恥であったのか、幸福だったのか、不幸だったのか」との質問に次のように答えています。「パプーシャやフィツォフスキがいなければ、多くのものが失われていたとは思います。人生の中の価値というものは、いずれも痛みをもって生まれて来るものだと私は思うからです。なかなか決められない。A か B かの選択の間には、さまざまな多義性がある」とのべているんです。さすがのコメントです。

(さとう・こういち&うじま・たいこ)

PAPUSZA | ポーランド映画 | 2013 年 | ロマニ語&ポーランド語 | モノクロ | 131 分 |
監督・脚本 ヨアンナ・コス=クラウゼ&クシシュトフ・クラウゼ

キャスト ヨヴィタ・ブドニク/パプーシャ、ズビグニェフ・ヴァレリシ/ディオニズィ、アントニ・パヴリツキ/イッジ・フィツォフスキ

あらすじ 書き文字を持たないジプシーの一族に生まれながら、幼い頃から言葉や文字にひかれ、詩を詠んだ少女ブロニスワヴァ・ヴァイス(愛称パプーシャ=人形の意)、激動のポーランド現代史に重なる、実在した女性詩人の生涯を描く。

監督プロフィール ヨアンナ・コス=クラウゼ(Joanna Kos-Krauze)/1972 年 12 月 8 日オルシュティン生まれ。ポーランド・テレビでキャリアをスタートさせ、ポーランド・テレビ主催の脚本家のスカラシップを獲得し脚本家としてデビュー。昨年 12 月 24 日に 61 歳で亡くなったクシシュトフ・クラウゼ監督とは、『借金』の脚本に協力したことから知り合い、2000 年のテレビ映画『Wielkie rzeczy(素晴らしきもの)』でも脚本を担当。ヨアンナのアイディアで始めた企画『ニキフォル 知られざる天才画家の肖像』では共同製作し、2006 年の『救世主広場』から共同監督となる。本作『パプーシャの黒い瞳』も彼女の企画である。さらに、ふたりで企画していた次回作、ポーランドとルワンダでジェノサイドの後にいかに生きるかを見つめた心理的な映画を撮影する予定。

カチョルさんとの再会

霜田 英麿

一昨年8月まで札幌コンサートホール *Kitara* の専属オルガニストを勤められたマリア・マグダレナ・カチョルさんが札幌でのコンサート（7月4日）などを終えて東京へ戻られたときに、在京会員の熊倉ハリーナさんとともにお会いしました。

実は、今回の来日前、東京のサントリーホールで7月（実際は6月）25 日に演奏会を行うとのメールを頂いておりましたが、とても残念な行き違いが重なってお聴きすることができませんでした。

それでも、カチョルさんの帰国の日の7月 12 日に東京で、*Kitara* の篠原さんと長谷川さんとご一緒にお会いすることができました。カチョルさんは専属オルガニスト時代も観光らしいことは一切していないので、お二人が今回、最後の日ぐらいは東京を案内したいと思って同行されたそうです。

その日は梅雨明け間近のとても蒸し暑い日で、日本橋の老舗の鰻屋に予約もなしにタクシーでご案内しましたが、長い行列でした。彼女は食後にも音楽関係者との打合せがあって、直ぐに元の歌舞伎座へ戻りましたが、長谷川さんの機転で、歌舞伎座近くの「銀の塔」という老舗の洋食屋さんで定番のビーフシチューを頂くことができました。出来たてのシチューはとても熱いのに、30 分後にせまった打合せ時刻に間に合うよう、カチョルさんを急かせてしまって悔いが残りました。

短い時間でしたが、カチョルさんは日本が大好きで、ハリーナさんも旧交を温めて、とても素敵な時間を過ごすことができました。篠原さん、長谷川さんありがとうございました。

（しもだ・ひでまろ、東京事務所）

写真：歌舞伎座前で（左から）篠原さん、カチョルさん、ハリーナさん、筆者、長谷川さん

《新会員のひと言》

新井藤子と申します。

現在私が行っている研究は、ブロニスワフ・ピウスツキの業績の一つにある博物館活動のうち、彼が博覧会展示、博物館展示にどのように携わったのかということの検証です。最終的にはピウスツキの携わった展示を復元し、博物館をチャネルとした視覚情報として観覧者に広く発信して、ピウスツキの業績を再検討、再評価する新たな手立てを確立することを目標にしています。

2013 年 10 月には、顕彰事業の一環として、白老のアイヌ民族博物館の敷地内にピウスツキの胸像が建立されましたが、日本国内における、日本とこの人物とのつながりへの認知度は、現在それほど高くはないように見受けられます。

日本におけるピウスツキの業績研究は、井上紘一先生や沢田和彦先生などのご研究をはじめとして、人物像や評伝の構築、すなわちピウスツキという一人物の生涯をポーランドやロシア、日本などの歴史上に復元し、民族学者としての像を確立させたという功績にその意義を有していると言えます。

今後、胸像のもとを訪れる人々に、ブロニスワフ・ピウスツキという人物をよりクリアに知ってもらうためには、ピウスツキの研究成果や博物館活動が、具体的、視覚的にはどのような様相のものであったのかを提示してゆく必要もあると思います。その提示を行うことは、次世代研究者としての自身の役割であり、なかでも、ピウスツキの携わった博物館展示を復元することは、彼の業績を視覚的、具体的に認知してもらうのに非常に有効であると考えます。

このような話になるとつい熱くなってしまい、言動を爆走させるたびに周囲の温厚な方々に助けていただいている私です。これにあきれず以後、どうか仲良くして下さいますよう、何卒宜しくお願い申し上げます。

（あらい・ふじこ）

初めまして、古屋育子です。

私は書家をしています。ある方より日本文化の同じ精神道の書道、武道という関係で、空手家のポーランド人のクチンスキー博士親子をご紹介頂きました。何より驚いたのは、本当に日本を愛し、そして日本の武道をポーランド人の彼らが真剣に世界に広めるため努力しているという事でした。クチンスキー博士はポーランドのウッジに個人の力で広大な道場をつくり日本の武道の普及に努めています。

クチンスキー博士とお会いした時、私の故郷の山梨県南部町は南部氏（南部藩）発祥の地で名馬の産地だと自己紹介しました。お互いの境が消えたのはこの時でした。話を聞いた彼らが興奮して、彼らの故郷も名馬の産地で、騎馬軍団フサリアがオスマントルコ軍15万に対し3千騎で、短時間で勝利したと最強騎兵のお話を詳しく語ってくださいました。内容を聞いてその強さに感動し、語ってくださるクチンスキー博士の人柄にポーランド人の誠実や暖かい心を感じ感銘しました。初対面で意気投合しポーランドが一気に好きになり、その勢いのまま会に入会致しました。

でも中々日本にいてポーランドに触れる機会はありません。ポーランド料理のお店もありません。是非、ポーランド人の方がたやポーランドに関わりのある方がたと交流したいです。ポーランドの人はとても親日的なのに私達は知りません。ポーランドの美しい自然、文化、歴史を日本人にもっと知ってもらう活動を望みます。　（ふるや・いくこ、東京在住）

写真：クチンスキー博士（右）と筆者

山本伸一と申します。

はじめまして、私は弦楽器が趣味な普通の会社員です。2年前に動画サイトでグループ・モーツァルタという弦楽四重奏団の演奏を見たのがきっかけでポーランドに興味が湧きました。演奏もさることながらユーモアが新鮮に映りました。よくよく調べると他にもコメディグループがあり、どれも素晴らしかったです。何が素晴らしいかというと、もちろん言葉はわかりませんが“舞台の上で生で演じられての観客の大爆笑”なんて今まで見たことありませんでしたから。まるで昔のドリフを見てる気にもなりました。

観客の笑いと笑顔が素晴らしいからきっとポーランドは素晴らしい国なんだろうと感じて、この目でポーランドという国を見たくなり、その年のお盆に現地滞在1日半という強行スケジュールでワルシャワにも行きました。北海道と同じようなカラッとした空気で過ごしやすく、現地の方々からは日本人には無い活気が感じられポーランドの魅力に嵌りました。

コメディからポーランドに食いつきましたが、歴史や文化・言語などもっともっとポーランドのことが知りたくなっています。遠い国で接点なんか無いと思っていた国が、調べると 90 年前ワルシャワから東京まで飛行機で往復したポーランド軍のかたがいたり、日本画を集めていたポーランド人がいて今ではその博物館ができていたり、対ロシアのためポーランドに行った日本人がいたり、戦前にクラクフ出身の指揮者が 10 年間日本で活動していたりと、歴史を紐解くと興味深いことが沢山出てきて面白いですね。

（やまもと・しんいち）

写真：冬季五輪でポーランドが初金メダルを勝ち取った大倉山ジャンプ台で

〈日本アレンスキー協会主催〉

グラズノフ生誕 150 年＆タネーエフ没後 100 年記念演奏会

今年 2015 年はロシアの大作曲家グラズノフ生誕 150 年、タネーエフ没後 100 年にあたり、それを記念して二人の作品を集めた演奏会が札幌と東京で開催されます。

札幌・開催情報

日時：10 月3日（土）18:30 開演　／　会場　：　ザ・ルーテルホール（中央区大通西6丁目）

入場料：一般 2,500 円、会員 2,000 円（全席自由）　同封の札幌と東京のフライヤーをご参照ください。

※チケットのご購入・お問い合わせは（電話：090-2875-7981）氏間（うじま）さんまで

（本会会員の佐々木譲・川染雅嗣・高橋健一郎・松井亜樹・氏間多伊子さんが名誉会長・会長・副会長・運営委員を務められる日本アレンスキー協会主催の演奏会をご紹介します―安藤厚）

《寄稿》

抜き差しならない、僕とポーランド

霜田千代麿

2015 年7月 19 日より 30 日迄、世界伝統空手道連盟のプレジデントのボーデック・クウェチンスキ氏と息子のヴィテックと、クラクフ大学を中心に二千名に空手道の指導をしている師範、パウェルの三名が来日、前半5日間同伴した。今回、来日の目的は伝統空手道の師範西山先生（米国、ロスアンジェルス在）が亡くなられた後、日本人の師範が不在だった為「心・技・体」のそろった人格者を彼等に紹介する為であった。

本年「全日本空手道連合会」（日本最大の空手道組織）に小生の大学空手道部先輩で空手道のプロ野上修一氏が六代目会長に就任された。吾々一行は、九州うきは市吉井町の道場を表敬訪問した。又、福岡より、6月ポーランドのスタラア・ヴェシで行はれた世界大会でお目にかかっている、神野勝師範（日本空手道協会）も同道された。

その後、7月 23 日より 25 日迄、北海道に滞在、2000 年以来 15 年ぶりに吾が家を訪問された。札幌では弟英麿が大倉山ジャンプ台を案内してくれた。

1972 年、冬季オリンピックでポーランドのフォルトナ選手が 111 メートルの記録で金メダルをとった年である。この年の9月に小生がポーランド・ウッヂ市へ留学した年でもあった。それがポーランド伝統空手道発足の原点でもある。二、三年前にポーランド伝統空手道「40 周年記念誌」の表紙見開きに、微笑して型を演武している 40 年前の我身が居た。これこそ正に腐れ縁と呼ぶべきものであろう。

2016 年 10 月クラコフ市で世界伝統空手道連盟の世界大会が準備されており「武道会議」も計画されています。心して英語、ポーランド語を勉強しなければと考えています。（しもだ・ちよまろ）

写真：博多祇園山笠にて（左から）神野師範、パウェル、筆者、ヴィテック、ボーデック、英麿

『ポーランド語辞典』の頃の思い出（1）

小原　雅俊

イヴァシュキェヴィッチの短編集を出そうではないか、と木村彰一先生（1915–1986）が言われたのは、週に一度白水社に詰めて日本で最初のポ和辞典『白水社　ポーランド語辞典』の編纂が終わりに近づいていた頃だったろうか。その日の作業を終えて、これも恒例になっていた飲み屋へと向かう途中でなかったことだけは確かだ。神保町界隈を白水社に向かって歩いていたのをよく覚えているからだ。「君、最近は一日一冊、アガサ・クリスティーを原書で読んでいるんだがね、愉快ですな、クリスティーは」――そう言ったのも、今にもぶつかりそうに行き交うグリューネ・アレーの通行人の間を縫ってのそんな散策の時のことだった。あの時一緒に木村先生の言葉に頷いていたのは誰だったろうか。多分、木村先生の教え子に相応しく、今なおよく飲み、よく食べ、旺盛な研究に意欲を燃やしている（とは言え、スラヴの小言語の研究者に割かれた日本の大学のパイはあまりにも小さい）当時の若き T だったろうか。木村先生が東大を定年退官し、早稲田大学に移ったあとの教え子のひとりだから、あれはもっと後の出来事だったろうか。

木村先生から学んだこと
―学問と、赤提灯から豪華ホテルのバーまで―

私にとっての木村先生は大学の恩師と言うわけではない。『白水社　ポーランド語辞典』に監修者としての名こそ挙げられていないが、古典文献学を修め、あの木村謹治の息子としてドイツ語に通暁し、博友社の『ロシア語辞典』の中心的編者でもあった木村先生を抜きにこの辞書はあり得なかった。六

年間の作業、とりわけ最後の三年間の週に一度の午後を白水社の一室で続けた共同作業は、いわば辞書編纂学とは何かの演習のようなものであった。門前の小僧よろしく実地で学んだというだけではない。ワルシャワ大学のポロニスティカ（ポーランド文献学部）で時代ごとのポーランド語学史とポーランド文学史を毎年の辛い口頭試問に苦しみながら学んできた私には帰国した当初、少なからず自惚れがあったとすれば、それが徹底的に打ち砕かれたのも木村先生の学問的造詣の深さの前にであった。厖大な印欧語に関する体系的知識をもとに説明されるスラヴ語の、そしてポーランド語の音韻規則の説明は、一介の語学生の体験的思い込みを悉く打ち破ったのである。私はポーランド語について根本から勉強し直さなければならなかった。遂にスラヴ学の何たるかを修めることは出来なかったが、帰国以来、二十五年間、相も変わらず間違いを繰り返しながらも、休むことなくポーランド語を教えて来れたのは、ひとえに木村先生との出会いのおかげだと思っている。

木村先生が、ライフワークとなるはずであったラテン語辞典の編纂に本格的に取りかかったばかりのところで、仕事場にしていた日本学士会館の一室で突然他界されたのは、つい昨日のことのような気がするというのに、もう随分昔のことになる。およそテディ・ベアとは言いがたいがっしりした体躯の持ち主に相応しく、片時もニトログリセリンを離さなかったというのに、である。葬儀で自宅に伺ったとき、私はドイツ語・ドイツ文学関連の厖大な本で埋まった書架の中に、なぜか無意識のうちにアガサ・クリスティーを探していたものだった。

人の死はその人との関係を記憶の領域に閉じ込める。自然の法則を免れることが出来ないのは分かっている。だが、アインシュタインならずとも、その才能に恵まれた人の頭脳に刻み込まれた厖大な知識と人格に一瞬にして関わることが出来なくなるとは何と残酷なことだろう。木村先生はお茶の水や神田界隈の飲み屋やホテルのバー、昔の大隈会館のレストランや周辺のおでん屋、深夜、タクシーを駆った迷路のような狭く、入り組んだ世田谷区の路地が、スラヴ学者に相応しいその豪放な飲みっぷり、“味覚”を知らぬ健啖さとともに鮮やかに記憶に蘇ってくるが、もはやあのいかにも人間味溢れる表情で私の問いに答えてくれることはない。最後の仕事となった日本で初めての本格的な教科書『古代教会スラブ語入門』やヘンリク・シェンキェーヴィチの『クオ・ワディス』のポーランド語からの全訳に見られる学問的緻密さと豊かな文学的素養をもはや直に学び取る術はない。

七十年代の日本では、すでに東欧の国々との文化交流がかなり盛んになっていたし、経済関係も発展しつつあったとは言え、ロシア語以外で本格的なスラヴ語辞典の出版を企画するというのはおそらく常軌を逸した行動であったに違いない。まさかその二十年後に「東欧革命」が成功し、その「余波」で国立大学にチェコ語科とポーランド語科が誕生することになろうとは想像だにしなかった。折りに触れて、遠い未来の日本における更なるスラヴ学の発展への熱い思いが幾度となく私たちの口にのぼせられてきたのは確かであれ、北大、東大と、日本の主だった大学にロシア語科を次々と創設してきた、あの木村先生にさえも予想出来なかったに違いない。

もっとも『白水社　ポーランド語辞典』も当初は単語帳に毛が生えたようなものを考えていたもののようであった。それが編纂の作業を続けるうちに、用例こそ少ないが、ほぼ完璧な文法記述を備えた、優に二万語を超える語彙数を誇る「小辞典」にと変身を遂げたのであった。最初から編纂メンバーに加わっていたとはいえ、辞典の企画の段階は私にはつまびらかでない。おそらく、後のポーランドと日本の文化交流の“フィクサー”を自任していた吉上昭三氏（1928−1996）と私たちの辞書のもうひとりの隠れた共編者（なぜなら私たちの厖大な、とてもきれいとは言えない原稿をすべて清書して、印刷所に渡せる状態にしたのは他ならぬ彼なのだから）であった白水社の伊吹基文氏の“陰謀”であったに違いない（そして伊吹氏もまたかつて、木村先生に心酔したスラヴ学の学徒だったし、木村先生らとともに赤提灯から豪華ホテルのバーでの酒席までとことんスラヴ学者の誉れを守ったひとりだ）。

吉上・内田夫妻の無私のポーランド愛

まだ留学中に出した一冊の翻訳書を目に留めて、全くの畑違いであった私を“発見”してくれたのは、吉上昭三・内田莉莎子（1928−1997）夫妻であった。一面識もなかった二人から舞い込んできた突然の手紙がなかったなら、その手紙の後を追うよう

写真（上）：千野先生と木村先生（右）（神山孝夫氏提供）
写真（中・下）：我が家の近辺の野鳥たち　by 小原

にポーランドに姿を現した二人が帰国した後の「おい、辞書を作るぞ。帰って来い」の一言がなかったなら、さて、三十過ぎまで、学年末試験の恐怖に怯えながら、しかしその一方で、生まれて初めて知った学問の面白さに、憑かれたように学んだポーランド・スラヴ文献学を、とにもかくにも日本で役立てることが出来ただろうか。

しかもこれは決して私のケースが特別なわけではない。さまざまな分野の優秀な若手研究者を“発見”し、ポーランドの魅力の虜にさせ、今日の日本のポーランド学の担い手を数多く育成した吉上昭三氏にはまさに“フィクサー”の名が相応しいかもしれない。もしポーランドと日本の今日の付き合いが、他人行儀でない、相互の深い人間的信頼を基礎にしたものになっているとしたら、日本学研究者だけでなく、すべてのポーランドの友人への吉上昭三氏の変わることない愛情と二つの遠い国々の人々の時空を超えたユートピアへのロマンチストの夢のおかげであろう。その突然の悲劇的な死は、「ポーランド文化の現在・過去・未来」と銘打った個人雑誌『ポロニカ』(年刊)の発行(「十巻は出さなくちゃ」と言っていたが、第五号が最終号になってしまった)も、新しい時代のポーランドと日本の交流の基盤にしようとしたポーランド財団の夢も志半ばで断ち切ってしまった。

ポーランドを知らなくとも、子供の頃、内田莉莎子さんが翻訳・紹介したポーランドの児童文学や絵本を一度も手に取ったことがない日本人はいないに違いない――あの病弱な体のどこにあれほどのエネルギーが秘められていたのだろうか。戦後のポーランドの絵本のほとんどを、誰もその右に出る者がない、あの天性の内田魯庵譲りの見事な日本語で紹介し続けた莉莎子さんも、吉上昭三氏の死の一年後、後を追うように他界した。「いやあ、僕も疲れたよ」――突然の悲劇の数日前の、いつもの長電話の中での述懐。人生のすべてを託していた夫の思いも寄らぬ葬儀の日の、入院中のベッドから抜け出してきた莉莎子さんの気丈な表情。

もう吉上夫妻のように謙虚に、しかし無私の情熱でポーランドを愛することは誰にも出来ないかも知れない。その情熱に惹き付けられた無数の人々がいた。後にチェコ語の専門家であるにも拘わらず、チェコ語科よりもポーランド語科に優位を与える形で、当時の学長だったロシア文学の碩学原卓也氏(1930–2004)とともに東京外国語大学への両学科設置を実現することになる千野栄一先生(1932–2002)もそのひとりだろうか。（つづく）

（こはら・まさとし、1940 年福島県生まれ。執筆当時(1999 年6月)、東京外国語大学ポーランド語専攻教授。本稿はワルシャワ大学刊の JAPONICA 12/2000 に Henryk Lipszyc, Romuald Huszcza 両氏によるポーランド語訳が掲載された。）

写真：吉上・内田ご夫妻（栗原朋友子さん提供）

ポーランド & ニッポン歳時記

身の隠し場所　近所の家では二階を増築しています。辺りは埃と騒音でいっぱい。さらにお隣さんもリフォームの最中です。実際、ポーランドの夏休みと言えば、旅行かリフォームの季節です。隠れ場所がありません。

zmęczeni słońcem　陽に疲れ
skrawka zieleni szuka　緑を探す
mała dżdżownica　ミミズかな
ポズナン市、津田モニカ

burza minęła　嵐過ぎ
nad leśną dróżką stoi　森の小道に
brzozowa brama　樺の門
ワルシャワ市、ピョトル・ヴジェチョノ

夏の雷女房逃げれば猫までも
（雷―三夏）

むらさきの花何のはな芋の花
（芋の花―仲夏）

ラベンダー果ててピエロの悲しけり
（ラベンダー―初夏）

岩見沢市、霜田千代磨

《北海道のポーランド人から》

誓います / Przysięgam

～日本とポーランドの結婚式について～（3）

アグニェシュカ・ポヒワ

前回は、主に宗教がポーランドと日本の結婚式にどのように影響したか、また式の種類についてお話ししました。次は、両国での結婚式へ至るまでについて具体的に比べてみたいと思います。会場探し、衣装選び、カメラマン探し等々はどのように違うのでしょうか。

式の日取りとゲスト

まず、結婚式の日取りの決め方からスタートしましょう。両国とも一般的に結婚式が一番多い曜日は土曜日で季節は夏です。日本もポーランドも、会場の人気によって数ヵ月から1年という待ち期間があるので、日付決定は会場探しと同時に行います。

日本の場合は、日取りを決めるときに六曜カレンダーが重要になります。仏滅は絶対に避け、なるべく大安や友引の日に式を挙げるという風習があるからです。新郎新婦本人は暦をまったく気にしなくても、その両親や親戚に強く信じる人がいる場合は、日付選びが難しくなります。

ポーランドには、名前に“r”が入っていない月（例：maj＝5月）に結婚しないほうがいいという面白い迷信がありますが、現代社会ではそれを守る人はいないようです。日取りは本人たちと（ある程度）ゲストの都合に合わせて選びます。

ゲストといえば、日本では、親戚と友人に加えて職場の同僚と上司を招待することが多いですが、ポーランドではそれは考えられません。結婚というのはプライベートなイベントで、仕事とは無関係だからです。また、ポーランドでは、新郎と新婦がそれぞれ一人の証人を選ぶのが常識です。兄弟または親友にお願いするのが一般的ですが、証人の仕事は正式書類に署名するだけではなく、結婚準備を手伝い、余興を考え、結婚当日まで二人の総合付き添い役を務める大切な助っ人です。

ウェディングの準備――プラン vs.口コミ

日取りとゲストを決めてからの準備は、ポーランドと日本では進め方がだいぶ違っていきます。両国の結婚準備の特徴を一言でいうと、日本は「プラン」、ポーランドは「口コミ」というようにまとめることができます。

前回お話ししたとおり、日本ではホテルウェディングがもっとも一般的です。気になるホテルがあれば、そこのウェディング担当に相談していくつかのウエディングプランを紹介してもらいます。基本プランには会場、装飾、食事だけではなく、衣装、写真・動画撮影、エンターテイメントなどが含まれており、すべてがパッケージになっています。さらに自分の予算に応じて衣装や食事をもっと豪華にする、余興を増やすというアップグレードや追加オプションも付けられます。チャペルと披露宴会場から衣装スタジオ、写真スタジオまで、必要なサービスのほぼすべてが一ヵ所に備えられているため、ウェディングの計画は効率的に立てることができます。

その反面、自分らしく結婚式を組み立てることはほぼ不可能で、自分のイメージしたウェディングを仕方なくプランに合わせる必要があるのは大きな減点になります。ほとんどのホテルは、そこと契約を組んでいるサービス会社を利用させているため、例えば自分で買ったお気に入りのドレスを着る、知り合いのカメラマンに撮影をお願いするなど、自由な行動は制限されてしまいます。それが許されている会場を見つけたとしても持込み料を払うことを要求される場合が多いです。

ところが、ポーランドでは式は教会ですが、パーティーはホテルというより、レストランまたは部屋付き多目的式場を使うことが多いです。会場予約と一緒に食事プランと装飾プランを決められるが、それ以外の物をすべて自分で探して決める必要があります。そこで口コミが重要になってきます。会場担当に聞けば、おすすめの花屋やバス会社、最近結婚した友達に聞けば、おすすめの美容サロンを教えてくれます。つまり、周りの人に聞く、またはインターネットで検索するのが主流です。そのプラス面とマイナス面については次回もっと詳しくご紹介します。

（Agnieszka Pochyła）

今後の活動予定

〈第29回総会・『創立25周年記念誌』出版祝賀会〉

日時 ： 10月17日（土） 総会　16:00～
写真撮影　17:00～
祝賀会　17:15～

会場 ： ホテル札幌ガーデンパレス 4F 真珠の間
祝賀会会費： 会員・一般 5,000 円
学生・こども 2,500 円

ホームページを更新しました

本会のHPを大幅に更新しました。一度ご覧ください。 http://hokkaido-poland.com/

会員名簿（住所）の訂正

熊倉ハリーナ 〒206-0001 多摩市和田1581 オリエント聖蹟桜ヶ丘ハウス208
（住所変更は安藤（1ページ目左上に記載）までお知らせください）

新会員をご紹介します

松山 敏（まつやま さとし）さん（2015.7入会）

《重要》年会費納入のお願い

新年度（2015 年10月～2016 年9月）の年会費（一般 3,000 円、学生 1,500 円）と、維持会費（任意のご寄付:1口 1,000 円）の納入をお願いします。

本会の活動は皆様の年会費とご寄付により賄われています。ご理解とご協力をお願いします。

【郵便振替口座】記号 02740 5 番号 19735

【加入者名】北海道ポーランド文化協会

※ 事務効率化のため、送金はできるだけ郵便局のATM扱い（手数料は無料）でお願いします。

※ 総会・祝賀会でも会費を納入できます。

※今回の納入額を記した個別のお願い文と振替用紙を同封しております。

『創立25周年記念誌』をお分けします

会員には本号とともに記念誌を1部お届けします。そのほか1部1,000円のご寄付でお分けします。追加分は、総会・祝賀会の返信用ハガキに記入するか、1ページ目左上に記載のFax/e-mail（安藤）あてにお知らせください。

目　次

第 29 回総会・『創立 25 周年記念誌』出版祝賀会 / 『創立 25 周年記念誌』が完成（安藤 厚） …… 1
《第 72 回例会報告》“午後のポエジア”5を体感して（塚本 智宏） …… 2
スタニスワフ・ヴィスピャンスキの辞世の詩（栗原 成郎） …… 4
バルシュチェフスキ『ベラルーシ幻想譚』より（越野 剛） …… 6
《第 73 回例会報告》時計台コンサートを聴いて（高橋健一郎） …… 7
『パプーシャの黒い瞳』をみて（佐藤 晃一＆氏間多伊子） …… 8
カチョルさんとの再会（霜田 英麿） …… 10
《新会員のひと言》（新井 藤子 / 古屋 育子 / 山本 伸一） …… 10
〈日本アレンスキー協会主催〉グラズノフ生誕 150 年＆タネーエフ没後 100 年記念演奏会 …… 11
抜き差しならない、僕とポーランド（霜田千代麿） …… 12
『ポーランド語辞典』の頃の思い出（1）（小原 雅俊） …… 12
ポーランド＆ニッポン歳時記（津田モニカ / ピョトル・ヴジェチョノ / 霜田千代麿） …… 14
日本とポーランドの結婚式について（3）（アグニェシュカ・ポヒワ） …… 15

POLE

第 86 号 ポーレ編集委員会
氏間多伊子／尾形芳秀／栗原朋友子／越野剛／佐光伸一／ラファウ・ジェプカ